

## 夢見る会質問状への回答

### 質問 1

- ① イエズス会士シャルルヴォワがその著書『日本国の歴史と概要』(『HISTOIR ET DESCRIPTION GENERLE DE JAPON』)パリ(1736)の挿図版画として残した「安土山の城と都市の地図」(Plan de la Ville et Chateau D'Anzuquيامa)のタイトルと「信長の楽園と呼ぶ」(appellee le Paradis de Nobunauga)については広く知られている資料です。

ピエール・フランソア=ザビエル・ド・シャルルヴォワ(1682-1761)(Pierre François Xavier de Chalevoix)は、フランス東部のサン・カンタンで生まれ、16歳でフランスイエズス会に入り学び、宣教師としてヌーベルフランス初の歴史学者として、1705年から1709年までケベックに滞在、1717年からは五大湖、ミシシッピー川からメキシコ湾に渡るなど、アメリカ大陸各地を探検し布教して回った人物として有名です。

その成果として、『新フランス(カナダ)植民史』を著し、また、日本でのキリスト布教にも関心を示し日本関係の著書も著しています。

『日本国の歴史と概況』はキリスト教伝来での日本におけるイエズス会の活躍を素材にしたもので、この挿図は、構図は上部を空とし、中央の山に4つのエリアを道でつなぎ施設を配置しており、円形の城壁の内に「Aは皇帝の宮殿。Bは砦、Cは領主の館」(A.le Palais de l'Empereur .B.la Citadelle .C.Maisons des Seigneurs.)の注釈をいれています。いずれも実際の日本の城郭の形や名称とはかけ離れた表現となっています。また、これらの3つの構成要素を道で繋ぎ、全面中央に河川と道がつながる大きな都市を描きこんでいます。都市の前には、大きな白地スペースがあり、右に「大津」(D'Oits)、左に「湖」(Lac)と描かれています。これが琵琶湖に接する安土山と山下町であるなら、琵琶湖に面するように書かれている山下町との位置関係がおかしいことはよく知られていることです。また安土山の構造自体は全く描きこまれていず現実とは大きな差異があります。

これらのことを踏まえると、シャルルヴォワが現地を知らないこと、また「安土山図屏風」を見て描いたものではないといえます。彼が活躍していた1700年から本が出版された1736年代は、屏風が存在した時期から約140年ほどたっており、すでにバチカンから失われています。このようにこの資料は同時代性が無く、二次資料といえるものと判断しています。

- ② 以上のことから、この資料を、安土城天主復元につながる直接的資料とすることは不可能ですが、「安土山の城と都市の地図」(Plan de la Ville et Chateau D'Anzuquيامa)のタイトルと「信長の楽園と呼ぶ」(appellee le Paradis de

Nobunauga)のタイトルがあるという意味において、この図が1700年代に安土城の名と信長の名がヨーロッパに伝わっていたことを示す貴重な資料であることには間違いと考えています。

## 質問2

① 「天守指図」については、故内藤昌氏が発見し詳細に分析されたうえで復元考証の資料として使用されていることは存知しております。内藤氏の著書にもある通り、「天守指図」には、安土城の天主であることはどこにも記されていません。指図には「池上右平 正治」(寛文頃 1671年頃に活躍した加賀大工)の名がありますが、「天守指図」は、全て子孫の池上延世(宝暦頃 1760年頃に活躍した加賀大工)の時代の写しであり、信長時代の資料ではないことがあげられます。池上家にこの指図が伝来した理由も記録としてはみることができません。その形状が安土城の天主台と酷似していることは理解できますが、実際の穴蔵とは形状等が違っているなど部分的な違いも多々あり、建築家によっては懐疑的な指摘もされています。現時点では決定的な資料として扱うには多々疑問が残っており、今後とも引き続き検証が必要で、いまだ積極的に評価する根拠はないと考えています。

② まず、斜め瓦が摠見寺資料として滋賀県立安土城考古博物館に収蔵されていることは存知しています。このような、個人が拾得した遺物は、文化財として取り扱うことが難しいものです。県としては今後、天主台周囲の発掘調査を実施し、新たな資料の発見を目指す予定にしていますので、それらと比較しながら検討していきたいと思えます。

ただ、斜め瓦が存在するからと言って、「天守指図」が安土城の指図であることを証明することにはなりません。「天守指図」は各階の柱位置と間取りを示したもので、屋根伏等屋根構造を記してはいません。斜め瓦から斜めの屋根を想定できることは当然の事と考えています。

③ 議事録公開にあたっては、公文書公開請求で開示を申請いただくこととなります。

## 質問3

内藤氏も言及されているとおり、「安土山図屏風」が「地図の画廊」に掛けられたのが、「地図の画廊」が完成した1583年の2年後の1585年4月4日で、ウィングがローマに滞在していたのは1589年9月です。彼がフィレンツェに発ち没するのは1592年7月末もしくは8月19日とされており、この間に模写したと言われてしています。

この間に、オルテリウスの為にラツィオ州の地図を模写しにバチカンの「地図の画廊」に入ったのが、オルテリウスにあてた手紙から 1592 年 7 月 13 日と判っており、この手紙に、「やっと今朝入れた。」とあることから、同日に屏風を見たとすることができ、この日に屏風を模写したとするのがもっとも妥当性があるされています。実際に残されているのは、ウィングの模写の原本ではなく本の挿図用に版面に起こしたものです。門や櫓の描写は、その形状から日本の城郭であることは間違いがありません。現状では最も屏風に近い信憑性の高い資料と位置づけられると考えられます。

#### 質問 4

デジタルであっても歴史的建築物の復元考証にあっては、建築の専門の研究者のご意見をうかがうことは必要であると考えていますので、今後検討を進めたいと思います。

#### 質問 5

考古学的な成果に基づいて安土城の構造を考えるだけでなく、なぜ、安土という地に織田信長が安土城を築いたのか、戦国時代における近江国や安土の持つ意味、信長の都市・経済政策など、安土築城の歴史的意義や安土城の歴史的な位置づけについても考えたいと思っています。さらには、たくさんの人々の叡智と汗が詰まった歴史的浪漫の結晶として、また当時の技術や文化の粋を集めた歴史・文化遺産として、幅広い視点で安土城について考えたいと思っています。

#### 質問 6

公開することは可能ですが、全文を変更することのない形での公開をお願いします。

安土城天主の復元については長い研究史の中で様々な説が発表され、現在も研究者により新たな研究が進められています。安土城の見える化にあたっては、それぞれの説を研究史の中に位置付け、その価値について紹介したいと考えています。